

安城のうつりかわり

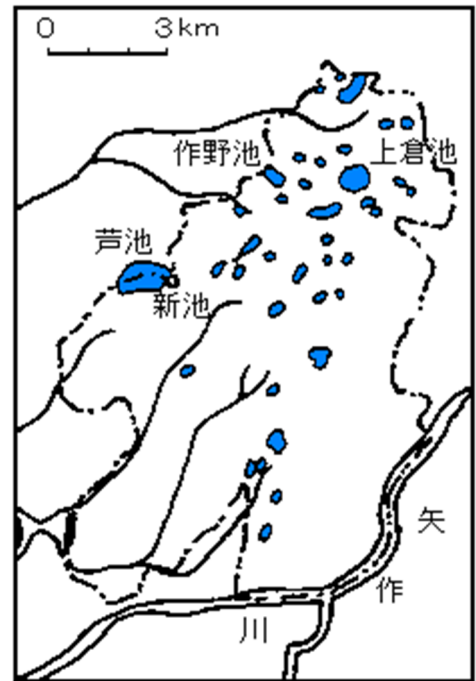
明治用水とともに

郷土を学ぶ『にしき』安城市立錦町小学校編 より

1 安城が原

安城の町には商店も多く、人通りもたいへん多いですが、いまから150年前まではどのようなところだったのでしょうか。そのころの安城は、町や駅などはまったくなく、ただ安城ヶ原という原野が広がっていました。いばら・小松・アシなどがはえているだけで、道もなく、人がふみこむとまわりのアシで姿が見えなくなるところもあるほどでした。ですから、この原野にわけいて遊ぶこともなく、下草やたき木を必要な時だけとっていたのです。きつねやたぬきが数多くすんでいて、ため池の堤防に子ぎつねが日にあたりながら、遊んでいたと伝えられています。

今では、昔の様子を残しているところは、あまりありません。和泉町の半場川の右岸や市役所のうらの松林が昔によくにているといわれています。松林の東側や南側には、少しの畑がありましたが、水がたいへん不足する台地でした。そのために、田畑に水をかけてやらないと、作物がかれてしまいます。ですからたくさんの井戸が必要でした。



ため池のあったようす

農民は(南安城の)安城村から出かけてきては、田畑の仕事をしていたので、たいへんな苦勞でした。ですから安城の子どもは、おとうさんの顔も知らないといわれるほどで、朝はやくから日没すぎまで働いたのです。今からではとても想像のできない苦しい生活でした。

そんな水不足になやむ土地だったからこそ、用水をつくる必要があったのです。

2 明治用水を開く

明治用水は、矢作川と巴川を水源とし、安城を中心に、岡崎・豊田・知立・刈谷・高浜・碧南・西尾の八市にまたがり、約7700ヘクタールをかんがいしています。明治時代を代表する大工事として「明治用水」と名づけられ、開通以来130年以上をへた現在でも、人々の生活を支えています。

1880年(明治13年)明治用水13キロメートルが完成しましたが、これより60年以上も前、すでに都築弥厚という人が、その必要性を訴えつづけていました。当時、碧海台地は、水の便が



悪く、農民はため池や井戸を利用して農業をしていました。水の不足はなくなり、村々での水あらいがたえませんでした。

そのころ役人として農民の貧しさや困った様子を見、また新田開発の知識もあった都築弥厚は、矢作川から人工の水路をひいて、台地の開かんを計画しました。そして、数学者でもあった石川喜平らの協力のもとに、実地測量を行い、江戸幕府に開発の願いを出しました。

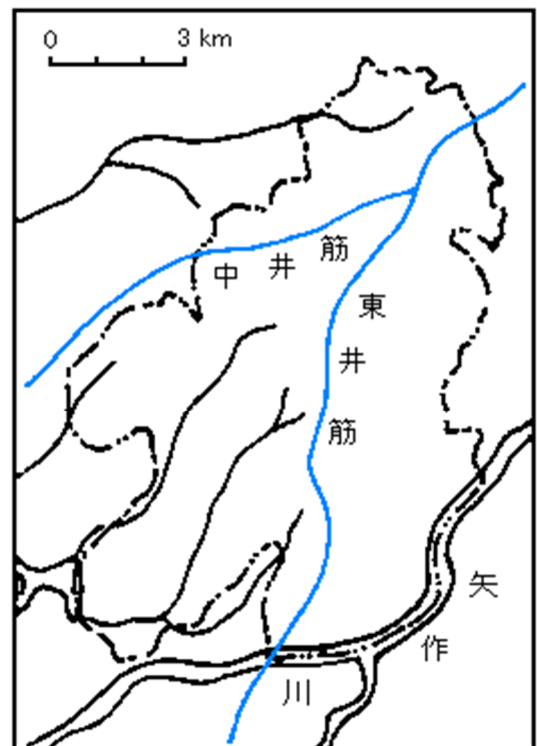
しかし、この計画は、水害を恐れた農民や、新田が幕府の領地となってしまうことをきらい大名などからの、強い反対にあいました。そのため、妨害をさけて夜間に測量を続け、計画図と多くの借金を残して、都築弥厚は病気で死んでしまいました。

3 明治用水着工

やがて明治の時代になり、用水の必要なことは、誰の目にも明らかでした。岡本兵松は、碧海台地のかんがいのための用水路を、伊予与八郎は、矢作川周辺の水害を防ぐための排水路を、それぞれ計画していましたが、県からの希望により両者が協力することになりました。都築弥厚の努力がこの二人に、ひきつがれたのです。

しかし、この二人にも弥厚同様に苦労は多く、農民の中には、まだまだ反対する者もいましたが、それ以上に資金あつめに苦労しました。

用水工事の費用7万5740円(現在の約10億円)を村々や、資産家の協力であつめました。さらに愛知県側との意見のくい違いなどがあって、着工までの準備はなかなか進みませんでした。



明治用水水路図



しかし、これらをなんとかのり

こえ、明治12年1月、県の指導のもとに工事が開始されると、翌13年には、上倉池までの13キロメートルが通水し、4月18日には盛大な完成式が行われています。都築弥厚が新田開発を志して以来70年、多くの人々の苦難のすえ始められた工事は、この後もつづけられて、碧海台地全体をうるおす大用水になりました。

そして、昭和46年の矢作ダムの完成とともに農業用水としてだけでなく、工業用水としても利用され、現在でも人々の生活になくてはならない「地域の水」として利用されています。

4 安城の農業

明治用水がひかれた後、原野が次々と開かんされるようになり、田がひろがり、着々と農業が発展しました。大正の終わりごろになると、全国に先がけて農業の近代化がすすみ「日本デンマーク」とよばれるまでになりました。デンマークという国のように農業がさかん、ということでのまにかそうよばれるようになったのです。

盛んになった特色の一つめは、多角形農業ということです。それまでは、米麦が中心で、天候やねだんによって農家の収入は大きく変化し、たいへん不安定な状態でした。そんな中で山崎延吉が、米・麦の他に養鶏・野菜・かいこ・果樹などの生産にも力を入れるように農家の人を指導してまわりました。生産物を市場へ送ることで現金収入がうまれ、年間を通して働くことができるようになりました。



当時、有名だった板倉農場では、米・豚・梨・野菜・牛の五角形農業でした。しかし、多くの農家は、三種類くらいの生産が多かったようです。

もう一つの特色は、共同化ということです。農家の人々が作物をつくったり、生産物を販売するのに組合をつくって力を合わせてやりました。このようにして、ますます、安城の農業は発展していきました。また、生産したものを加工する会社を農家の人たちがお金を出し合ってつくることもしました。三河食品とよばれたその会社は、ケチャ

ップや缶づめ、たくあん漬などをつくっていました。

5 駅ができる

1889年(明治22)に東海道本線が開通しました。その次の年の1890年(明治23)に、安城駅ができました。しかし、かんたんに安城駅ができたわけではありません。



岡崎駅と刈谷駅の間は、安城を横切って15.7キロメートルありました。この間に一つ駅をつくろうという計画があり、その駅をどこにしようかというのが、問題になりました。そこで、今の三河安城駅あたりにしようという考え(箕輪村の考え)と、今のJR安城駅の東あたりにしようという考え(安城村の考え)が出てきました。

その二つの村は、それぞれに「駅をわれわれの村に」という運動をおこないました。その運動の中には、次のようなものもありました。安城村の人々は、駅の利用者

が多くなければ、安城村に駅はできないと考えました。そこで毎日、手弁当で岡崎駅まで歩き、そこから岡崎－刈谷の間のキップを買って汽車に乗り、刈谷駅からまた歩いて帰ってきたといひます。

このように運動がはげしくなったので、このままでは、安城村と箕輪村との争いになると心配した西尾の町長さんは、二つの村を話し合わせました。その話し合いで、駅は二つの村の間につくる、ということが決まりました。そうして1890年(明治23)6月、原野のまん中に安城駅ができたのです。

駅ができると、駅に通ずる4本の道路がつくられました。これによって、町と村を結ぶ道路が安城駅に集まることになりました。道路ができるとともにいろいろな店ができました。人力車店、運送店、飲食店、旅館、学校、銀行、医者、風呂屋、くつ屋などができ、安城郵便局も人通りの多い駅前へ移されました。



安城駅のまわり(1903)年

6 郡役所が来る

安城では、明治23年に駅ができ、この駅を中心にして町が発展してきました。明治のおわりころには、碧海郡の警察署が知立から移転してきました。このことは郡の大切な仕事をする町になったことでもあります。しかし、当時は古くから栄えていた知立には、まだまだおよびませんでした。



明治24年に農林学校ができたことは、農業の発展に大きな力をもつことになりました。しかし、町の人々はもっと安城を発展させるためには、郡役所を作ることが大切だと思っていました。郡役所ができることは、安城が知立にかわって碧海郡の中心になることですから、駅に通じる道をふやし、道路を広くして交通の便をよくしました。

そのほか、郡農会や製糸会社をつくったので、多くの人が集まり、町らしくなったところ、大正3年、知立から郡役所がくることになり、安城は碧海郡の中心地になったのです。こうして、郡の大切な仕事をする役所が、今の文化センターの場所にできました。

その後、大正9年には、農事試験場ができ、つづいて女学校も作られました。町の発展をめざして、大正5年には、町の名を示す区画も定められました。その町名は、本町、本通り、栄町、朝

日、御幸、花ノ木、末広でした。

また、大正11年には名古屋鉄道の知立駅から、東岡崎間が開通して今村駅(現在の新安城)ができました。つづいて、大正15年には、碧海電鉄が通り南安城駅や北安城駅ができました。こうして安城が交通の発達によって、郡の中心になったことと、いろいろの役所や農業指導機関が作られたことなどから、今の安城の町の基礎がつくられたのです。



7 安城の工業

明治時代以前には、この地方にはみるべき工業はありませんでした。わずかにこの地方特産といわれる 三河木綿を原料にした綿糸業があっただけでした。



明治に入って、国の政策もあり、工業をさかんにしようと努力がつづけられました。明治の終わりごろには、愛三製糸(今の市役所立体駐車場の場所)、山丸製糸(今の市役所の場所)という会社ができることができました。養蚕農家からまゆを買い、生糸を生産しました。この地方で良質のまゆが、多量にとれるようになったためです。

大正の中ごろ(1920年ごろ)には最もさかんになり、蚕を飼育する農家は全体の25パーセントにまでになりました。また、製糸工場で働く人が、当時の工業人口の8割にも達し、製糸業がまさに工業の中心となりました。

しかし、大正末期(1925年ごろ)に、日本中が不景気になってしまいました。盛んになってきた製糸業も この不景気の波にのまれて、しだいにおとろえていきました。

また、「日本デンマーク」とよばれ盛んだった農業も、日中戦争が始まり、太平洋戦争が激しくなると、労働力を兵隊にとられ、米や麦の増産が国の政策になったので、しだいにおとろえていきました。

8 工場の進出と都市化の波

安城は、明治用水の通水によって、農業を中心に急激に町が発展しました。そして鉄道や道路が整備されると、工業の面でも発展してきました。

まず、大正のはじめごろに、紡績工場がJR安城駅付近につくられ、また、機械工場が名古屋から移ってきて、新安城駅付近につくられました。戦後になると自動車部品工場が市内に多くつくられました。

とくに1960年(昭和35年)には、安城の産業を発展させるために、工場誘致条例という法律

をつくって、積極的に工場を誘致しました。そのため、市外から50以上の工場が、東海道本線や国道一号線ぞいにつくられました。これらの工場がわざわざ安城市にうつったのは、原料や製品の輸送



に便利であること、働く人がおおぜいいたこと、土地が安いことなどによっています。里町、高棚町、東端町にある大規模な工場は40ヘクタールもの土地を確保しています。

工場がたくさんつくられれば、農業のできる土地＝農地は、当然減っていきます。田畑は年々工場や住宅地にかわり、現在では市の面積の30%ほどになってしまいました。工業化、住宅化がすすんできたようすは、産業別に働く人口をみてもよくわかります。農業を主にやっている人の割合は、しだいに減り、現在では、市全体の人口の2パーセントにすぎません。その分だけ、第二次、第三次産業で働く人がふえ、かつて「日本デンマーク」といわれた安城は、農業・工業・商業の調和のとれた町へと、大きくかわってきたのです。